

総評 2020. 9月分 杉本真維子

「ブローチになった／アゲハを飼っている」

モノになってもなお残る「いのち」というものを想像させる。それを胸や襟のあたりに留めることの正しさのようなものに打たれる。

「時計の針が重なって／一本足になる瞬間／不思議な期待に迷い込む」

時間という不思議なもののかたちをこの目で見たいと、誰もがひそかに思っているのかもしれない。

「確かに言葉には重さがある／喋れば喋るほど、／じぶんがかかるくなっていくから」

実感と言葉がうまくつりあうところに、骨のようなものが一本通っている。これを身体性というのだろうか。

「眠りすぎ／降りたバス停／稲の波」

眠りすぎてもまだ眠りの途中であるような、いくらでも眠れる若い身体を思わせ、印象的。熟睡のような深い稲の海が心地よい。

そのほかの佳作は以下のとおりです。来月も投稿をお待ちしています。

「ぷぷ び ドゥ／で／人参を切る」「三日月は二人が座るには狭い」「電車の中で透明な鞆に／透明な水を透明な瓶に／入れている人を見た／水になりたい」「褒められたい／だけだった／母の遺影へと／飾るすすきの大きなふくらみ」「知ってる？／イルカって触ると／茄子みたいなんだよ」